

C01

機能的矯正装置プレオルソ・タイプⅢを使用して咬合誘導を行った1例

○吉村 薫

(よしむら小児歯科医院・福津市)

【目的】 幼児期や学童期の下顎前突は不正咬合の中でも患者側が早期に気づくことが多く、下顎前突を主訴に来院されることがしばしばある。3歳以上の自然治癒はほとんど期待出来ないため、早期の改善がその後の上顎骨の成長や、口腔機能発達不全の改善にも良いと考える。今回、4歳患児をプレオルソ・タイプⅢSで短期間に改善したが、混合歯列期経過観察中に起こった問題を再度プレオルソ・タイプⅢSで改善し長期観察を行ったので報告する。

【症例】

H27.12.1 初診 主訴：うけぐち

H27.12.29 矯正のため資料採得

H28.1.28 プレオルソ・タイプⅢS使用開始、日中1時間および睡眠中使用

H28.3.4 調整および機能訓練

H28.4.1 前歯部交差咬合改善

H28.6.4 使用中止

H30.8.6 後戻り傾向が見られたためプレオルソ・タイプⅢSを再度使用開始その後、永久前歯の正中離開、翼状捻転が診られたため上唇小帯形成、歯肉切除を行った。

R1.5.11 前歯部翼状捻転は改善

【結果】 乳歯列の下顎前突はプレオルソ・タイプⅢを使用し早期に改善した。しかし機能の獲得が不十分で後戻りと永久前歯萌出障害が起こった。再度プレオルソ・タイプⅢSを使用し口腔周囲筋のトレーニングを行うことで捻転も改善傾向ではあるが機能の獲得は不十分である。

【考察】 乳歯列期の下顎前突はプレオルソ・タイプⅢで比較的短期間で改善することが多い。しかし、口腔機能が十分に獲得されていない場合、装置の使用を中止すると後戻りを生じる。改善後の定期管理と口腔周囲筋のトレーニングを継続して行うことが大切である。

C02

集合性歯牙腫と正中過剰埋伏歯の併発例施術後の経過を追った1例

○堀内 礼子

(医・永友会 堀内歯科・諫早市)

【緒言】 埋伏歯や歯牙腫が存在し、摘出した場合、その後も正常な歯列等の成長を促すことができるように長期的に経過を追っていく必要がある。今回、長期口腔管理例について報告する。

【症例】 4才6カ月女児。口腔内管理を希望して来院されたが、診査の結果、上顎正中過剰埋伏歯と下顎前歯部集合性歯牙腫を併発していた。

【処置および経過】 初診の段階で口腔内は乳歯列、左側交差咬合、有隙型歯列弓、左下ABは癒合歯。咬耗は特に右上Aが著明に進んでいた。集合性歯牙腫が存在する右下AB間は若干の歯間空隙があるものの目立つほどではなかった。6才6ヶ月時上顎前歯部の過剰埋伏歯抜歯、7歳6ヶ月、下顎前歯部の集合性歯牙腫摘出を行った。抜歯後、永久歯交換が進み、歯冠の大きさ、形態の不良所見も認められなかった。ただ、左側の前歯部も含む交差咬合が残存していた。その後、交差咬合の程度が進んできたため7才11カ月から半年程度プレオルソ3を使用。態癖や口腔筋機能の指導の上で一旦良好な状態になった。舌挙上を指導するにあたっては左側挙上の方が難しかった。待合室ではよく左側に寄りかかったり、もたれかかっていると言う風景がよく見られた。兄と妹も受診しているが実際に埋伏歯や歯牙腫を発現したのも下顎の偏位が発現したのも本人のみであった。そのような不安要素を感じながら経過をみていると、10才7カ月ごろ、顎偏位を伴う交差咬合の傾向が目立ってきた。ちょうど、吹奏楽(ユーフォonium)をはじめた時期と一致していた。その後、積極的矯正治療は希望されなかったこともありできるだけ左右の偏位を防ぐことを目標に注意を行った。

【考察】 様々な要素が継続的に的確な注意ができれば理想的形態により近づくと思われた。